

東洋大学における井上円了研究の現状

竹村 牧男

たけむら・まきお／東洋大学学長



竹村——みなさん、こんにちは。東洋大学の竹村牧男といいます。本日は貴重な機会にお招きいただきまして光栄に思います。私は今初めて下田歌子先生のことをいろいろ伺いまして、大変偉大な方だと深く感銘を受けている次第です。また実践女子大学におかれましては、下田歌子研究所を発足させて、旺盛に活動されています。これにも非常に感銘を受けているところでございます。私が学長を務めております東洋大学を創立したのは明治期の哲学者の井上円了という人なのですが、本日はこの井上円了について、本学における学祖研究の現状について、しばらくお話しさせていただきますと思います。

まず井上円了という人物の人と思想について、簡単にご紹介したいと思います。井上円了は安政五年の生まれですから、下田歌子先生より五年ぐらい弟ということになるかと思えます。新潟県長岡地方の東本願寺の末寺の長男に生まれました。いろいろな経緯があったて、東本願寺のエリート教育を受け、そこから東京に派遣されて

東洋大学に入り、文学部哲学科を卒業します。これが明治十八年、満二十七歳の時です。明治二十年、満二十九歳——数えでちょうど三十歳で、「三十にして立つ（而立）」ということだと思えますが——、私立哲学館という小さな学校を始めます。お金も何もない、ただ民衆の教育に挺身したいという情熱だけで、この哲学館を始めました。これを維持するために、全国を講演活動などで行脚して、民衆から浄財をいただいたりしました。その意味で哲学館は、民衆立の大学であると言っても過言でないと思つていきます。明治三十六年になり、私立哲学館大学という大学になります。その開学は翌明治三十七年です。どういうわけか円了はすぐ、明治三十九年、この大学長は辞しまして、それからは社会教育の実践として、全国津々浦々行脚して講演活動を展開し、民衆に語



りかけたという方です。大正八年六月に、中国で講演活動の最中に倒れて亡くなりました。この円了の全国巡行は大変な回数で、生涯七千回以上だろうと見られています。汽車は三等、弁当は握り飯、

実に質素なかたちでひたすら民衆のために講演活動を続けたという生涯を送っています。この写真は円了のお墓ですが、井桁の上丸で、「井上円了」ということなんだろうと思います。

円了には生涯にかなりの著作がありますが、これらの内容は、仏教学、あるいは哲学、宗教学、心理学、教育学、そしてみなさんよくご存知の妖怪学と、実に広範な範囲の学問をされています。本学では、創立百周年の頃、記念事業として『井上円了選集』をまとめまして、選集ですが全二十五巻になっております。

特筆すべきは、下田先生も渡英したということでしたが、円了は生涯に三度の世界旅行をしています。哲学館設立の翌年には、欧米に教育事情・社会事情の視察に行きます。それから、明治三十五年頃はイギリスを中心に回っています。明治四十四年には南半球をすべて回っていて、地球の隅々まで歩いた方と言えます。そこで見聞したものの、その中でも良いものを哲学館の教育方針に反映させました。たとえば明治二十一年からの旅の帰国後、「欧米各国の教育法は、唯人の学力を養成するに止らず、人物人品人徳をも併せて養成するなり。……花のみを目的とするときは暖室中の寒梅の如く早く開花を見ることを得るも、其花の勢力に至りては樹木全体を養成するものに如かざること遠し。学力人物共に養成するは恰も樹木全体を養成するが如し」と述べていますように、人物をも養成するというところに、非常に意を用いました。明

治三十六年の渡英後には、イギリス人の国民性に学んで、日本人も「独立自活」の精神を重視すべきと説いていますし、また当時すでに、日本人が外国でも働けるように英語や中国語の実践的な語学教育をしなければいけないと、国際化の方針へと舵を切ったということもありました。

哲学館が当時としては非常にユニークだったのは、福澤論吉、大隈重信らが、経済学や法学などの実学をもとにした教育活動を展開したのに対して、円了が哲学をベースにした教育を展開した点です。なぜ円了は哲学を重視したのか。その理由はおよそ三つ挙げられます。

第一に、人々の知性を開発して、それによって国を豊かにすることです。知性を開発するには学問によらなければならず、高度な学問によれば高度な知性が開発できる。高度な学問とは、あらゆる学問の中央政府である哲学である。ゆえに哲学を学ぶべきであると、このような理由が一つです（「諸種の学問中、最もその高等に位するものはすなわちこれ哲学にして、よくこれを研修するにあらずんば、もつて高等の知力を発達し、高等の開明に進向するあたわず。……哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学と称するも、決して過褒の言にあらざるなり」）。

第二に、哲学はけつして観念的で世間から遊離したものでなく、哲学には哲学の実用性というものがあるのだ。それは大工

の物差しのようなものだ。物差しで家をこしらえることはできないが、しかし家を作るには物差しが必要だ。つまり社会の仕組みも、根本的な原理・原則を追究していかなければならないだろうということ（「大工の木を削るは尺度（ものさし）では削りません、けれども尺度は無用にして益がないかと云ふに、決して無用ではない。成程木を削り物を取り扱ふには格別尺度でなくとも取扱ふことが出来るか知りませんが、仕事が入り込んでくれば尺度が必要となるに違ひない。哲学は実際に在て直ちに世間を支配するものでもなく機械を拵へるものでもないが、世間人事の尺度となるは哲学に違ひない。故に直接に事に当らんでも無用と云ふことは出来ません」）。

さらに三つ目は、体を健康にするには運動・体操といったものが必要なように、心・精神を活性化する、知性を開発することは自然にできることではない。やはり訓練しなければならぬ。そのためにはどうすればよいか。「思想の錬磨」——考察の訓練が必要だが、それに哲学はもつとも適している、と。およそそのような理由で、円了は哲学を基盤とした教育活動を展開したと言えるかと思えます。これ以外にも、資料に円了自身の文章を挙げておきました。

こうした円了の言葉から、本学の建学の理念として、「諸学の基礎は哲学にあり」「知徳兼全」「独立自活」というものを据え

井上円了の思想 1

「しかして諸種の学問中、最もその高等に位するものはすなわちこれ哲学にして、よくこれを研修するにあらずんば、もって高等の知力を発達し、高等の開明に進向するあたわず。これまた当然の理なりとす。哲学の必要たる、ここにおいてか知るべきなり。

それ哲学は百般事物につきて、その原理を探りその原則を定むるの学問にして、上は政治法律より下はもって百科の理工芸におよび、みなその原理原則を斯学に資取せざるはなし。すなわち、哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学と称するも、決して過褒の言にあらざるなり。……」
(明治20年6月「哲学館開設の旨趣」)

井上円了の思想 2

「諸学の基礎は哲学にあり」は、後の第22代学長・佐久間鼎が作った言葉。しかし円了の『哲学一夕話』第一編(明治19年(1886)7月)の「序」に、「略してこれをいえば、純正哲学は哲学中の純理の学問にして、真理の原則、諸学の基礎を論究する学問というべし」(『井上円了選集』第1巻、34頁)とある。また、円了は哲学について、「万学を統轄する学」「学問世界の中央政府」というほか、「諸学の王」「統合の学問」などと説いている。

「……純正哲学において論定せるものは、倫理、論理、その他の諸哲学の原理原則となり、哲学諸科の論定せるものは、理学、法学、その他の諸学科の原理原則となりて、学問世界の中央政府はすなわち哲学なり。……そもそもわが国の文明を進むるは、政治、法律のひとりよくするところにあらず、理学、工芸のひとりよくするところにあらず、その諸学の政府となり、その諸芸の根柢となりて、よくこれを統轄し、よくこれをしてその区域を保ち、その位置に安んぜしむるの学を講究するを要するなり。……これよりしてのち世人をして、哲学は学問世界の中央政府にして、諸学諸芸の根柢なるゆえん、ならびにこれを講究するの必要と、そのよく文明を進め国益を助くるゆえんを知らしむべしと信ず。」

(「哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ」、『哲学会雑誌』、明治20年2月・3月)

井上円了の思想 3

「今譬を挙げて哲学は学問中の学問であるから直ちに実用に関するものでないと言ふこと(について、そうではないということ)を説いて申ませうに、哲学は大工の尺度(ものさし)の如くとも申ませうか。大工の木を削るは尺度では削りません、けれども尺度は無用にして益がないかと云ふに、決して無用ではない。成程木を削り物を取り扱ふには格別尺度でなくても取扱ふことが出来るか知りませんが、仕事が入り込めれば尺度が必要となるに違ひない。哲学は実際に在て直ちに世間を支配するものでもなく機械を拵へるものでもないが、世間人事の尺度となるは哲学に違ひない。故に直接に事に当らんでも無用と云ふことは出来ません。」
(明治20年9月16日「麟祥院での開館式での演説」から)

井上円了の思想 4

「而して此学の効用は一方より簡単にいへば思想練磨の術として必要なる学問なりといふことを得べし。そもそも人は肉体と精神との二部より成るものにして、その肉体練磨の術としては運動あり体操ありて以てその健康を保持するに足る。而して此外になほ精神練磨の法ありて之か強健を致すのすべなかるべからず。……そもそも人の思想なるものは決して徒らにその発達を致すものにあらず、身体が強壯におけると同様に必ずや之を教練する所以の法術あり。……

而かも余が哲学を以て如何なる人にも之を研究するを要すといふ所以は、唯思想練磨としての要あるを以ての故なり。」
(「哲学の効用」『天則』、明治24年7月)

井上円了の思想 5

「余は従来、古今東西の哲学者の諸論もその大要だけ一通り研究し、その帰するところ人生の目的は活動に外ならぬと自得し、哲学の目的も人生を向上するに外ならぬと知るし、爾来活動主義をとりて、今日に至るものである。

活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり。

これが余の主義である。すなわち吾人の天職はこの活動によりて、人生を向上せしむるにありと自信している。しかしその向上は一身より始めて一国に及ぼし、一国より世界に及ぼすをもって順序を得たるものとし、何人も国家のために尽瘁せよと唱えている。」
(『奮闘哲学』)

井上円了の思想 6

「単に哲学そのものよりいえば、向上がその特性とするところにして、これに重きを置くべきものであろうも、もし更に進んでその向上はなんのためかと問わば、向下せんためなりと答えざるを得ない。すなわち向下せんための向上にして、向上門は方便、向下門は目的となるであろう。また現今にありて向上門は古来の説を反復するまでなれば、哲学の大本としては、余はすでにその理源を究め尽くせりと思う。故に余は近来もつばら向下の一道に全力を注ぎつつある。」
(『奮闘哲学』)

山はその高きを以て貴しとせず植林の用有るを以て貴しとす。川はその大なるを以て貴しとせず灌漑の用有るを以て貴しとす。学はその深きを以て貴しとせず利民の用有るを以て貴しとす。識はその博きを以て貴しとせず濟世の用有るを以て貴しとす。

ております。「諸学の基礎は哲学にあり」は、円了自身の言葉ではありませんが、円了の考え方の中に当然あつたものです。「知徳兼全」は明治二十一年に欧米から帰国して言われた言葉で、「独立自活」は明治三十七年イギリスから帰国して言われた言葉で

す。その他教育の方針に関しましていろいろなことを、その都度言われております。そこからさらにテーマをピックアップし、概略こういったものが円了先生の教育理念ということになる。ただ、「知徳兼全」などと言っても、なかなか今日の学生には伝

わからないだろうと思ひまして、六年前に学長に就任した際、わかりやすく表現したいと思ひ、「自分の哲学を持つ」、「本質に迫つて深く考える」、「主体的に社会の課題に取り組む」とまとめました。

そして東洋大学の心として、次の二つを挙げました。「他者のために自己を磨く」——これは、哲学には「向上門」（真理を追究していく方面）と「向下門」（それを社会や人々のために役立てていく方面）とがなければならず、向下のために向上するのだと言われているのですが、それをわかりやすく表現した言葉です。それから「活動の中で奮闘する」は、円了先生最後の著作が『奮闘哲学』という題名で、その中に「活動はこれ天の理なり、勇進はこれ天の意なり、奮闘はこれ天の命なり」という言葉がありまして、それをこのようにまとめてみましたのです。

今日、高等教育界ではいろいろなことが言われております。何を知るかよりも何ができるようになるかが重要だ、想定外の事態に遭遇した時にみずから解決していく知性が必要だ、といったことがさかんに言われています。あるいは、社会人基礎力というもののを育成しなければならぬとか、さらには「自学自修」（アクティブラーニング）ということもさかんに言われています。そうしたことを考えてみますと、「諸学の基礎は哲学にあり」という言葉は、みずからの頭で考え、判断し、行動するということ、「知徳兼全

は、学力と人間力をともに培うこと、「独立自活」は、自学自修にいそしむ——そうしたことにつながるのです。ですから円了の教育理念は、まさに今日の高等教育の潮流を先取りしたものとと言えるように思います。

私どもの一般教養・教養教育——これを本学では基盤教育と言っていますが——では、カリキュラムを二〇一六年から新しくするので、三、四年前からこの検討に入りまして、円了の教育理念を、あるいは現在の課題をいろいろと考えて、東洋大生として身につけるべきものはどういうものか、という七つの基本方針を立てました。そしてこれを具体的なカリキュラムに落とし込む時に、以前はだいたい人文・社会・自然・語学・体育といったように分かれていた基盤教育科目の枠組みを、今日の高等教育の課題に対応する枠組み、また建学の理念をふまえるということで、「哲学・思想」「学問の基礎」「国際人の形成」「キャリア・市民形成」「総合・学際」とまとめました。そして「哲学・思想」の中から、二単位だけではありませんが、必修にもしております。総合科目においても哲学関係の科目をたくさん用意しましたし、専門科目においても、理科系でも「エンジニアのための哲学」という科目を置いたり、生命科学部では「生命倫理」を置いたり、それぞれの専門に関わる哲学科目を置いています。

それから、課外のものではありませんが、学生と一般社会人が

ともに勉強するリーダー教育として「井上円了哲学塾」を開塾し、今年で三年目になります。哲学教育というのは、哲学を教えるのではなくて、常識や流行にとらわれずに深く考えることを教えるということ——このことはどの科目にも通じることでありますが、双方向的な交流を大事にしながら深く考える訓練をするというところにこそ哲学教育というものがあるはずだと考え、そうしたものを本学の哲学教育としています。

次に自校教育についてですが、これにも力を入れていて、全キャンパスで行っています。東洋大学には井上円了研究センター（元・井上円了記念学術センター）というものが設置されているのですが、その研究員だった三浦節夫先生が全キャンパスを回って「井上円了と東洋大学」という科目を教えています。それとは別に、創立百二十五周年の記念事業として、自校教育用教材のブックレットを十五冊作りしました。これが完成したことで、どの教員でも比較的容易に自校教育ができる体制を作っております。

その他に井上円了に関する記念事業として、毎年、命日六月六日に学祖祭をしています。大学のすぐ近くに日蓮宗の蓮華寺というのがある、そこにお墓があります。円了の出身は東本願寺系ですが、お墓は日蓮宗にあります。そこで毎年行事をしております。それから十一月初旬の土曜日には、哲学堂祭といって、円了は孔子、釈迦、ソクラテス、カントの四人を四聖として祀った

のですが、そのうちの一人に関する講演を、年度ごとに順に行っております。それから学生対象の作文コンクール——およそ三万人弱の学生の中から、応募者は百五十人くらいと少ないのですけれど——、これを毎年実施しています。それから、円了先生の地元越路小学校では円了先生の研究をしているということで、東京に見学旅行に来た時に、本学で発表会を行っています。

次に井上円了研究の現在についてお話いたしますと、以前は法人立の「井上円了記念学術センター」で細々と研究活動がなされていたのですが、二〇一二年度から「井上円了研究センター」に改組し、本学の専任教員が何人か参加し、また客員研究員も数名加わって研究を進めるかたちになっております。事業内容は、井上円了に関する研究および調査、資料の整理・保存等々です。また、東洋大学の学校史、自校教育の研究、そして研究会や講演会、年報その他の刊行物の発行などもしております。

それから、文科省の資金をいただきまして、「国際哲学研究センター」というものを設置できました。実はこれは本年度で終わりににはなるのですが、その中に、「井上円了及び近代日本の哲学史研究」という分野を用意し、その中で井上円了研究をさらに進めることができました。井上円了の思想形成史の解明、その哲学の核心の究明、その哲学と仏教の関係の究明、その哲学と同時代の哲学思想との関係の究明、等々です。

そしてその「国際哲学研究センター」の中のその研究グループが母体となつて、「国際井上円了学会」という学会を立ち上げました。円了はほとんど海外に知られていないと思うのですが、妖怪学研究で関心を持つ外国の方が結構います。そして近代日本思想史・近代哲学史の研究者には井上円了にも関心を持つている人も多いということで、国際的に連携して井上円了研究を進めましょうということを取り組んでおります。この学会は二〇一二年の九月十五日に設立しまして、その規約では、事業内容として、年次大会・研究会・講演会等の開催、海外関連諸学会・諸研究機関との連携・交流、年報・会報等の発行、その他、というようなことを考えております。今年、四回目の学術大会を開催しました。最初の学術大会の記念講演は私がさせていただいたのですが、同時に海外から先生方をお招きしまして、シンポジウムを行いました。その後の特別講演は海外の先生にお話しさせていただいております。

それから、この学会を母体として、海外に赴き、円了のことを宣伝するという取り組みもしております。二〇一二年にはアルザス、二〇一三年はアメリカ、昨年はブダペスト、今年は十一月の二十六日と二十七日にヴェネツィアで行うことになっております。その他、円了関係の小さな博物館やいろいろな施設もございませす。また各キャンパスには、円了の年表や東洋大学の簡略な歴史

が配置されています。さらに、四キャンパスともに、円了が選んだ哲学の四聖のレリーフが、どこかに掲示されています。

まとめになりますますが、私学のもつとも核心的な主題は建学の精神を現代に活かすことにあり、ゆえにたえず学祖の思想・意志を研究すべきだろうと思っております。また、学祖の教育理念の中には、今日に通用するもの、未来を先取りするものがあるに違いなく、それらを自覚的に取り出して、今後の教育・研究活動に活かしていくこと、そして実際にそれを行っていくということが大事だと思っております。さらに、学祖がその当時の社会において果たした役割と功績を分析し、その意義について人々の理解を得ることにより、今日の大学そのものへの理解を深めていただくことも大切なことかと思えます。学祖の新たな挑戦への行動の跡を学び、その軌跡に照らして、今日の時代の中でどのようなイノベーションが必要なのかを深く考察し、果敢に行動すべきではないかと考えます。以上で簡単ではありましたが、私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

伊藤—— どうもありがとうございました。

それでは次に、日本大学の勢力せいりき尚雅先生をご紹介いたします。日本大学では現在、学生たちに自分たちの学校の歴史を理解してもらう自校史教育という取り組みに力を入れて、組織的にプログ

ラムを進めているそうです。勢力先生には、日本大学という日本でもっとも大きい大学の学祖教育の一端を御紹介いただきながら、またそういった取り組みに関わった経験から、学祖教育に対する

勢力先生のお考え、ご意見などもお話しただけるところです。では勢力先生、よろしくお願いたします。